成形圖說

菜蔬部 二十五

145
30
1

東京圖書館
和書門
農書類 一四五
一五函
一〇架
一九號
三〇冊

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

成形圖說卷之二十五

目錄

蕓薹（ヲチ）
芥（カラシ）
紫蘇（ヌカユ）
蓼（タデ）
附馬蓼（イヌタデ）
紅艸（オホケタデ）
獨活（ウド）
番椒（タワカラシ）

文部省圖書之印
明治八年文部省交付
TOKIO LIBRARY 東京書籍館 明治五年 文部省創立 FOUNDED BY MOMBUSHO 1872

成形圖說卷之二十五

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

成形圖說卷之二十五

菜部 葷辛類

袁知 和名鈔○和訓栞小立の義にやとおもり今も菜莖の長
を小立といへり多識編於知の假字に作るハ心得ぞ
此莖他の菜より高く薹哉起
ものの也漢名の義も同し

油菜 油を榨取より名く又ぶらとハ物の膏
脂ハ火に炕炙て出る故にいへるとぞ

種子菜 此ものの莖葉の食料に充るなく
唯其子実を收ものなれバ也

冬菜 冬生の芥菘と同
しく冬を種て生
長ものに因
てはべり

蕓薹 唐本艸○和名鈔引本艸及七巻食經等作芸薹曰雲
薹二音蓋古注の義如此綱目云分枝必多故名蕓薹

寒菜 以上胡洽方

胡菜 薹菜 埤雅

薹芥 沛志

油菜 綱目

油芥 閩書

臭菜 盛京通志

塌科菜 李氏食物

薁渠菜 正字通

芸薑芥

王氏菜譜

菜子 鄉談 正音

蕃名フルーム　コーレン

延喜式營蕓薹一段種子一升總單功二十八人下畧九十月の頃麥と同し時に下種を亦多く麥種の交に拌て播植す寒中を過て生長するのなれば春終に暖かれば直に延て薹起し冬菘に似て莖葉淺蒼に花攢さく滿地金の色なしその香馥郁つよく聞るべし集解に蕓薹不甚香とあるハ非也○花最雪霜を畏て春遲霜隕バ傷され本年蕓油の儉歉とあり○莢を結むと芥子のめし○子實色黑紫なり收乾炒あげ搾て油をもとめ其因民間の利寔に蔬蔌に勝れり

芥

凡油を醡るには菜実を或は乾し或は炒て舂爛く鞘
臼水車牛轉等なり車と牛とみは磨の盤を置て藥石の
軸輪の如き端を銕にて包て曳輾を又榨に臥槽立槽
の製あり皆椎にて其壓楔を整緊せば油を淋出せり今
九州南郊の田原廣く樹藝或は草菜を燒て火種せるは
是畑に作るには馬骨を碎き魚肉を爛して肥糞とし○
菜子油俗に謂種子油なり其燈油の料に充るものぞ○
食ふには其花を去るべし然ども今料理につかはず宋
高僧傳云蕓薹非五辛之種所食無罪
氣味生は辛冷熟すれば甘溫春月これを啖ば膝脚の痼
疾を発し故に腰脚を患ふものは多食を禁ずる能陽氣
を損し久瘡及口歯の病を発し小児は腹中の蟲生とい

へり○主治積聚結血を破血を殺し腫を消ひ又血風瘀血を治む本朝經驗○生にて擣丹毒腫痛に傳れば毒に隨ひ消食物知新○子主治一切禽獸魚介の毒にあたりなるに擂て白湯に和して服に吐を得て速に愈油も亦白湯に衝て服ぎし魚骨竹木の刺等の喉に立たるにも志らして服ときは吐に隨ひて刺脫ぬ本朝經驗

加良志即芥也和名鈔引食經辛菜加良士と訓ひ俗に芥子二字を罌粟の事とかし用ひはわろし

青芥訓蒙圖彙蒙といふなり

芥名醫別錄　辣菜羣芳譜　芥菘正字通　辛芳名物方言　鼠芥鼠食其花

而皮毛皆頓落故以名之　雀芥雀食其實而能飛翔故以名之以上本艸和名引崔禹食經

蕃名モスタールト　コロイト

此その子は色黄白と紫なるあり各某芥の名をもて呼べ又綢紗菜あり葉に皺紋ありて青翠なり故に青辛子ともいへ又蓋し大芥の一種なるべしまた實辛子あり葉小にして實おほしその花を拜き實をむすぶさと春月を期とす凡芥は秋のまぐに蒔て春を苗を分栽せ性暴風を畏るといふ皆その莖葉食料に充ぎし塩藏のものも辛香の氣ありて風味賞すべしその子を用ふるに陳きものをよしとす愈陳けれバいよく辛し臨用

の時研て末となすべし末となして貯蓄ものハその氣
ゆるし○一種一斤菜といふ或はこれを多加奈といふ
此子黄白の二種あり白きものをよしとす俗に是を白
辛子江戸辛子葉辛子などゝいふ即白芥なり食料及菜
用にこれをよしとすつくしの園にてハ能後のものを
よしとすその葉大にして縹緑白なる者也春月黄花を
ひらき実を結ぶ形ち白粱米のぬく或ハ云王世懋瓜蔬疏にいふ春不老な
里その黄子なるハ黄辛子刺辛子などゝいふ即刺芥な
里○西州の高菘てふものこれなり勝れたる東國にて
は漬菜と云本芥の属なれバ順鈔に辛芥多加奈と見ゆ

この莖葉春より夏かけて垣花とは時の美菹にて唯子
は用ひず廣群芳譜謂春不老一名八斤菜是也今清人ど
もゝ春不老と呼べり聯珠詩格種芥詩に不論青紫已離
離芥有青紫二種離々言芥子也烟濕春畦手自治一笑摩挲空洞腹是間
儘納幾須彌晉周伯仁指其腹謂王導云是中空洞無物又容卿等數百輩又禪家有芥子納須弥語
事文類聚に載は園蔬十詠芥詩に葉實抱芳辛氣烈銷煩
滯登俎效微勞乍食驚頻嚏○南嶽子に京にては心急く
短氣の人に芥をとおすれば辛を清きりと云おと世の
知る所なるに尾張の方にてはぬる賢らしと称して心
の縮温かなる人にさてさしれば辛をつよしといつり

然るば芥子に意なし其云ならはしに因て人の心に上
にはるのを禪説に本來無東西とはきこえられどその
無東西と説く禪僧の寺に立春大吉と書は時え然るし
立春大吉の四字は裏よりみても同し事ゆゑ邪鬼うち
へ出りて入るならぬ志るしと云ばまじなひに喜べし
迷故三界城と口には云て心に不定日を怕る属多し不
成日を忌む人にも金銀宝貨を與へば今日は不成日と
て交通しまや吾むかしの書に不成日乃事みえばされ
ば芥子てのおのか心に在て他に求ぬ理を志らば理に
は已のみなるてみ在りて一ならぬ道理とおもふおとを

又一層上に立入れば此理にあらぬを毎にあらす也
子氣味辛薫て温く鼻に帰す火の膓なる人くらふ鰌の
らば鮒田螺兎肉雞肉と同食すべからばその葉は便血
痔疾の人忌べし○主治胸膈中の冷痰を散し風毒腫四
肢に流て痰を治すまた胸中支満上氣にもよし○嘔吐
并に乾嘔已ばるに芥子を擣て末となし糊にまぜ残に
攤臍に貼べしまた凍死したるに湯にて芥子の末を
孫の内に填め衣類をかけ並手帨を熱湯にひたし
絞て其芥子の上をしらくと連に拭し温むべし 濟急方○
耳卒に聾閉るに芥子の末を乳汁に和綿を以て耳を塞

べし外臺秘要○小兒五癇みは芥子（カラシ）大鹿角鰓黒焼細末みし
石榴木を煮じその汁みて丸めみそて常れかく煮し
用ひよ○毋の疹（ハシカ）みハ芥子（カラシ）人参黒・二味粘飯みて煉合て額
の眉れ間み●是ぞみて貼るに一は膈の中にもち至
ふるひかゝる時かみ貼はおおく吸（キウ）ハ時よく発（オコ）り二日ハ時よ
れはよくなれバ落やすく昨みはよ
も発ハ芥子（カラシ）蒜（ヒル）を等分研らべし我み傳
痛（ムシ）方の頬みはべし但（タヾ）痕（アト）黒（クロ）くなる○筋攣（スヂムシ）雀瘕（イシブミ）みは
て二月許（ばかり）ぞ
子を粉（コ）みしわし湯みさて痛む方の耳み一滴（シヅク）入る時（トキ）

許（オキ）て出（イ）ては○蚘虫（ムシ）を治（ナホ）しみは芥子（カラシ）一研（スリ）て細（ムシ）の痛む
不ハ封（ハリ）べし我（ワレ）ハを取（トリ）換（カヘ）て封（ハリ）よ○痿物（ハレモノ）を一（ヒトツ）く痛痩（イタミヒリメ）くみ
は芥（カラシ）を擂（スリ）て水みて調（トキ）べ一以上和方
み芥子（カラシ）を搗（ツキ）ふるひて湯をさて服（ムク）べし凡（ヲヨソ）日に二度（フタヽビ）の
も方すの七（ナヽ）みて一七づゝを用ふ萬安
方

奴加延（ヌカエ）三代實録○即紫蘇也今ハ
通（トヲ）して紫蘇（シソ）とのミいふ
狗荏（イヌエ）是蘇の
統名也
紫蘇名醫別録○按（アン）ずるに通雅云蘇（ソ）ハ辛（カラ）
荏（エ）ハ白（シロ）蘇（ソ）水蘇（ソ）ハ雞蘇（ソ）荊（ケイ）ハ假（カリ）
菜曰（ヒ）ハ石蘇（ソ）是（コレ）本艸諸書
いまだあの説あし

野荏（ノヽエ）以上本艸和名
紫蘇（シソ）葉の色を
もていふ
艸之總名也紫（ムラサキ）者ハ曰（ヒ）ハ紫
蘇（ソ）雪艸（ユキノシタ）曰（ヒ）ハ海蘇（ソ）石香

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

蕃名ヲセイミユム

内膳式に荏裏とあるハ紫蘇巻にしたる醃蔵なるべし
此もの性濕地を好む春月種子を布べしその佳なれを
の色紫に皺ありて鋸歯深く表裏紫色なり俗にこれを
縐紗紫蘇といふ梅儲及業用に此をよしとすよろしく
花穂を発せざる内にその紫を收めとるべしあるひハ
地の乾疲たるによりて表青色に変するものありかゝ
るものはわのづから芳香も薄しまた一種表裏とも
青色荏葉のぬくにし芳香よろしきものあり東都の俗
にあるひハ青紫蘇といふ按に農圃六書に白蘇といへ

るものは是にや荏をもて白蘇といへど六書にだ荏を青蘇といひて今藥用のものは山城紀伊相模よりいづすまた東部の友園にて畳なふものあり性味ことにまたわりしこの小ども民間に稀なりその子は関東にては武蔵處澤よりいづすあるひは荏子をもて偽り充るもあり

葉氣味辛温にして芳香なり○主治氣を下し痰を消ず○霍亂脹満吐下せばるに生紫蘇を搗汁をとり飲しむべし乾紫蘇は煮汁を飲く亦よし○食滯吐て後紫蘇葉せんじ服してよし○積氣暈倒しやくのおこりて紫蘇の葉を水にて煎じ服す急なる時は熱湯にて擺出し用

ふ木香の末少汁を入てよし○吐血にハ黒豆一合紫蘇一匁水煎して服すべし○一切諸傷瘢に紫蘇の葉生にて揉傳て良○魚介禽獸の肉に中毒するに乾紫蘇葉煎じ服すべし 濟急方 ○蟹の毒に中たるに紫蘇汁よし 金匱要畧 ○生紫蘇煉て露となし ちんびきてふ器にて取酒中に置て少許を飲バ寒氣を除て身に快を生醫家に此を紫蘇零と云今按に乾たる葉尤香味あり 西方要記 ○風犬に咬まれるには紫蘇の葉を嚼くだき塗べし○鼠に咬たるにハ紫蘇を水にて煎じ服べし○又方砂糖黒白ともに塗べし○諸魚の毒に中たるには紫蘇の葉を食ふべし

以上和方一萬方 ○紫蘇散 膈氣にて胸内苦しく痰痞食その進ざるに紫蘇 茎葉を用二両 陣皮一両 半夏一両 檳榔子一両 桂心一両 枳殻三分 赤伏苓一両 柴胡二分を廉末し毎服三銭水中盞一ッ生姜二片入て六分に煎じ濾て熱し時を定め服べし○香蘇散 四時の瘟疫傷寒を治むべし香附子毛を燎去て木臼にて舂篩ふ 紫蘇葉各四両 甘艸炮一両 陣皮二両 咬咀して毎服四銭水一盞半入七分に煎し滓を濾て熱して服に日に三度時を定めず服なり若は又葱白三茎入き煎して汗をたらせば即奇験あり 以上萬安方 ○子の氣味も葉と大氐相同し疼を去にハ葉に勝といふあるひハ生にて擂胡麻に代てもちふべし素韻味あり○紫蘇飲 妊娠の氣和せ

ぞして胎上に騰て胸腹脹
き痛し苦む是を子懸と云 當飯三分 甘艸一分 檳榔子人參川
芎陣皮白芍藥各半両 紫蘇一両を細に剉て毎服半両水一盞
半生姜四片葱白七寸許入以上七分に煎し滓を濾て空心に
温め服あり○降氣湯腎虚を氣上て滞て快らぬ者
で冷て猶塞て痰実く喉渇き咳喘きし息短くあらく臍
腹ふくれ痛し喉かわきて物を思ひ頭をく目暈き腰痛
こ氣上に
る時には 黙蘇子九月子を揉て水に入て浮を
を去て沈を取て炮る五両川當飯殼を去て
炮 肉桂火に 半夏湯にて七反洗て薑の
ろ 中ぞ の汁に浸して一宿 厚朴粗皮を去薑の
汁に浸して
前胡米泔に浸し二両 陳皮三両 甘艸二両を細に剉ミ合て毎服三銭
水一盞半生姜五片棗一ツ入八分に煎し滓を濾て食後に
服に滓をば二たび一度に雜て復煎し服に此薬能氣を

下に昔京師俞山人專此薬を用て名譽あり此八味最真
方也此佗に人參附子五加皮或ハ大腹皮蘿蔔子を加へ
たるハ皆偽方に係ると知べし 以上萬安方

多泥 萬葉集○即蓼の總名也タデとは其辛辣の手掌にて
人を打をタテルといふがめく此ものゝ味人口を痠
痛しむるか故に名
に命にはといへり
香蓼 藻塩艸○多識編冬蓼と訓す 青蓼 新六帖 紫蓼 多識編 藍蓼 食鑑
柳蓼 真蓼
蓼 本艸 青蓼 綱目 紫蓼 本艸和名引陶景注紫蓼一名香蓼一名青蓼人所食綱目又有赤蓼
辣菜 正字通 委葉 爾雅 苦菜 通雅 陸蓼 爾雅注 肅寒郡 假

節侯 以上事物異名

蕃名ワートル　ペープル

蓼の属夥しその清冷辛香を賞ざしとせしものなれば
風什に香蓼と詠来りいにしへ葉よりは主に穂を
用しなどに万葉にもわゝ宿のほとで回幹はたやし
実になるまぐに見をしまたむ又はゝめ言にんより只
うさことにしほしみて入江の穂蓼かしさ世の中内膳
式に蓼葅四斗 料塩四升捻一升六合 などいふもしの穂を塩漬せ
しなり 禮記云鶉羹雞羹鴽羹釀之蓼今蓼料の専とする
ハ鮓鱠なり其酢に和ものの蓼醋ともむよろし
又薬料にも蓼実を用ふるあしハ方書にこれより今是

穂よりも葉をつかひためるわざとなりぬ○一種柳蓼
とて食料にせしものあり葉狭長にして細柳葉のぬし
こは本艸和名に香小蓼葉尖と云ものにや蓋しく水蓼
の種を陸田にやしなへバかく変るとそ又万葉の稚蓼
と詠るハ即本艸和名に水蓼和名美都多天とあるにて
丹波長平の勅號記にいふ河蓼とこゝえたりこの水蓼ハ
即蓼の水中に生して細小なるものなり一種冬を色て
枯ばるあり俗に是を冬蓼といへり播磨飾磨郡にハ四
時に穂蓼あり是亦香蓼の族なり赤穂の赤蓼ともトウ
タデとも呼て名ことなる也形ハ柳蓼と同し又紀伊の

大聖穂蓼も世に美種と次今京畿下鴨水の中などに生るその実の水蓼なり葉細長く味極て辣しむうしより
の名産より定家の歌に小山に松蕈ありに行人に加茂
此川原の穂蓼とぞ清む（蓼実よく毒を解ほ）蕈又相摸高座郡蓼川
村に蓼川といふ川あり濶さ二三間ふるぞ志の川道と
水中とに四時蓼生き極寒の候ハ川道なるハ枯て水中
のミ存ア味微し苦て勝て辛し実に自生の水蓼なるべ
し爾雅云蕃虞蓼又本艸和名に澤蓼（引雜要訣）一名女増（令人陰委）
故以名之（引拾遺）といふものなり○鱉甚蓼を畏る故に同食
すべからざといへり○本艸の木蓼ハ木天蓼なり

青蓼葉氣味辛温にして毒あり多食すれば心痛を発し
胃口を傷といへり其汁を羹に和ずれば甘味を生ず○
主治邪氣を除き氣を利ほ故に酒醴に釀して風冷を治
なり○霍乱に蓼をせんじ腰湯をするもよし○蜂螫に
蓼葉をもみて貼べし（濟急方）○中暑昏仆とて暑にあたり
死する時に濃蓼を煮て飲しむべし或ハ口中に灌ぎよ
凡藥にハ皆食蓼を用ふ（千金方）○婦人月事来て蓼或は蒜
を食ふ出とかうれ（萬安方）○腫物の痕に毛生ぬには香蓼
の實細末にし麻油にて調附べし○湯火傷（湯火傷を原本に燒所と書ヤケトコロと云義なりヤケドハ畧にハ蓼陰乾細末
あるべし或又ヤケアトの略語なるべし）

ふし柿漆にて調附べし疼愈るや灸の痛みもなし○途
中にて暑氣に中たるには蓼の葉生姜二味同しく研水
にてヒ一ツ呑ム○毒虫の螫るには蓼を摩附てよ
し○又方麻油にて火燭をして燃焙るぞやうを油に
て調附べし○鼻衄には蓼葉を挼てその汁を額に附べ
し以上和方一萬方○實主治同を明にしたし氣をひしし小兒驚
を治む○一種毛蓼は亦山蓼多識編ともいふ葉に皺と也
その二品あり並に白毛を生ふ挼て嗅バ芳香し其長短
きは尺計もあるは二尺許に及ぶ本艸和名引兼名苑尨蓼
といふにて即本艸の毛蓼なり○霍乱蚘虫心痛には山

蓼俗云十蓼蓼俗云十厚朴十番椒一名甘艸少云味初来に
多如多如三如
し糊にて豌豆の大さに丸め二三十粒づゝ白湯にて用ふ
和方一萬方○俗諺に食蓼虫の不知蓼とは性癖の自其非を
知らざるに譬ふ契沖歌にも蓼たむ虫をとは毋
ふらんせのかりきにもかゝるひとは左思が三都賦に習蓼虫之忘辛○離騒
に蓼蟲不能徙乎葵菜○魏文子云蓼蟲在蓼則生在芥則
死非蓼仁而芥賊也本可不失とぞゆ萬安方に蓼と芥と
合食すれば味を失ふとあり

狗蓼本艸和名○蘇恭艸にも犬蓼の名あり凡名物
は狗をして呼バ其物の甚だ非ざるの謂なり八十
幡蓼葉は八字の黒斑なるをもて目く○鬼蓼凡物の
時珍云毎葉中間有黒跡如墨點記
きを鬼をて呼べり野蓼高く太

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

馬蓼 本艸和名引陶景注 大蓼 同上引兼名苑 黒記艸 綱目

野生にて辛味なし葉大くて左右に紫黒色の斑文あり其状各色ひとしからず一種に似て大なるものあり是を蠶繭艸に充る説あり○神麯麦麯を製に此ホの自然汁を用ふ 此説始て水雲記に出せり天工開物云凡造神麯毎百斤入青蒿自然汁馬蓼蒼耳自然汁相和作餅又丹麯を造ルにも毎糟一斗入馬蓼自然汁三升明礬水和化といへり沖縄人に事なし但丹麯ハ南方の暖土に非ざれバ製がたし有明炭墼の端に馬蓼灰茄梗灰烟艸梗灰三の品を調合て附まぜ抱て火を保なり又松杉の節或ハ剛木の榾柮に馬蓼の灰をは米泔にて煉て榾柮の切口に塗附日乾て火を照半ハ灰に埋並バ火終に消ず○痼疾を治るに馬蓼と蛭 各黒焼等分 細末にし六分づゝ白湯にて用ふ日は二度夜は一度而穢物をひやばよし○西道産前産後には馬蓼葉莖とも黒焼細末にし白湯にて用ふ 以上和方一萬方 ○為家歌にかゝき哉刈をたやさぬ犬にでの穂に成るなどもひく人乃なき

大毛蓼 毛蓼に類て大きく莖葉に毛茸多き故に名く 狗蓼 和名鈔荘艸を訓ず是馬蓼と同名

穂垂蓼 花咲き穂を成し下へ垂るを以てせ 眞虫艸 蝮蛇の毒を解ぬの効あるを以て

波布天古夫良 こは元蕃舶より致せる本幹の名せ昔時或は雷豆に鄙り近ころ江門にて荘艸をも喚へ里蓋大和本艸荘艸の次線に此ものの形畧荘艸に似たるよしいへ是よりも俗に渾きし語

葒艸 正字通作紅艸 石龍 天蓼 以上別錄 鴻蕷 龍古 以上本艸 ○本艸和名龍古艸亦作龍鼓 ○通雅作龍鴻並語轉耳亦云龍頭艸 蘬 亦作蔟爾雅紅龍古其大者蘬 ○通雅作葒蘬 遊龍 毛詩作游龍 ○正字通云游ハ枝葉放縱貌 大蓼 綱目 天蓊 水紅花 以上事物紺珠 水紅蓼 醫学彙函 海蓬科艸 訓蒙字會 屈龍 淮南通志 水蓬花 河間府志 曲爰花 名物法言

此その好て水旁に生ず一たび生れば年々自苗を出れるきものは丈に近く葉多く幹こもに白茸あり幹長るに随ひ下葉ハ枯あがる秋穂を垂る頗る飢べし実ハ騮色にて光あり蒭蕘ごも此艸を馬牛に飼てハ歯を落れとて擇び拾る事なり

氣味鹹微寒にして毒なし消渇を治む葉を日乾し臭橙核と共に末とし白湯にて服ば疝痛を愈す ○此葉を挼て口に塗れば瘧を截れ拾て効ありと云り ○馬蓼葒艸の類固より葉品にあらず其名物の稍同種なるを以て附て載せるのこの他此なる者亦これに倣ふ

宇度 新撰字鏡 ○順鈔同し按に此その莖中空なり故に渭宇度とは宇登呂の約まる也譬ば葱をウツホクサと呼ぶを莖中の空なるを以てなり竅木かどをわきひ合はべし一説に此根の蹲居せしがぬくなるをいふ論語に夷俟をウヅ井ニツと訓を蹲踞をウツと訓の例なり

乃太良 同上

通知太良 大同類聚方○按に式鈔本艸和名等並に獨活と訓て是藥剤と總注と

やるの称と紀え殺うの太良ハ總木の名なり其を呼ぶと總いみ似て野生の艸木なまバ野とや土ぶの名を冠らせ呼ぶハ鹿おもて志々宇度あり此羌活に係るの名あり或曰志々と云てべちる宇度あり山野に自ら生ずるを以て類称まぶハ長尺以上にまるの宇ハ和名に志加と佐伊伎呼松おちがが如し獅子の字に化るハわろし千沙ガ穿に出る者の土名なり是真の獨活にして横漢にて羌活と云ガ如し亦産地に就て名を異にん

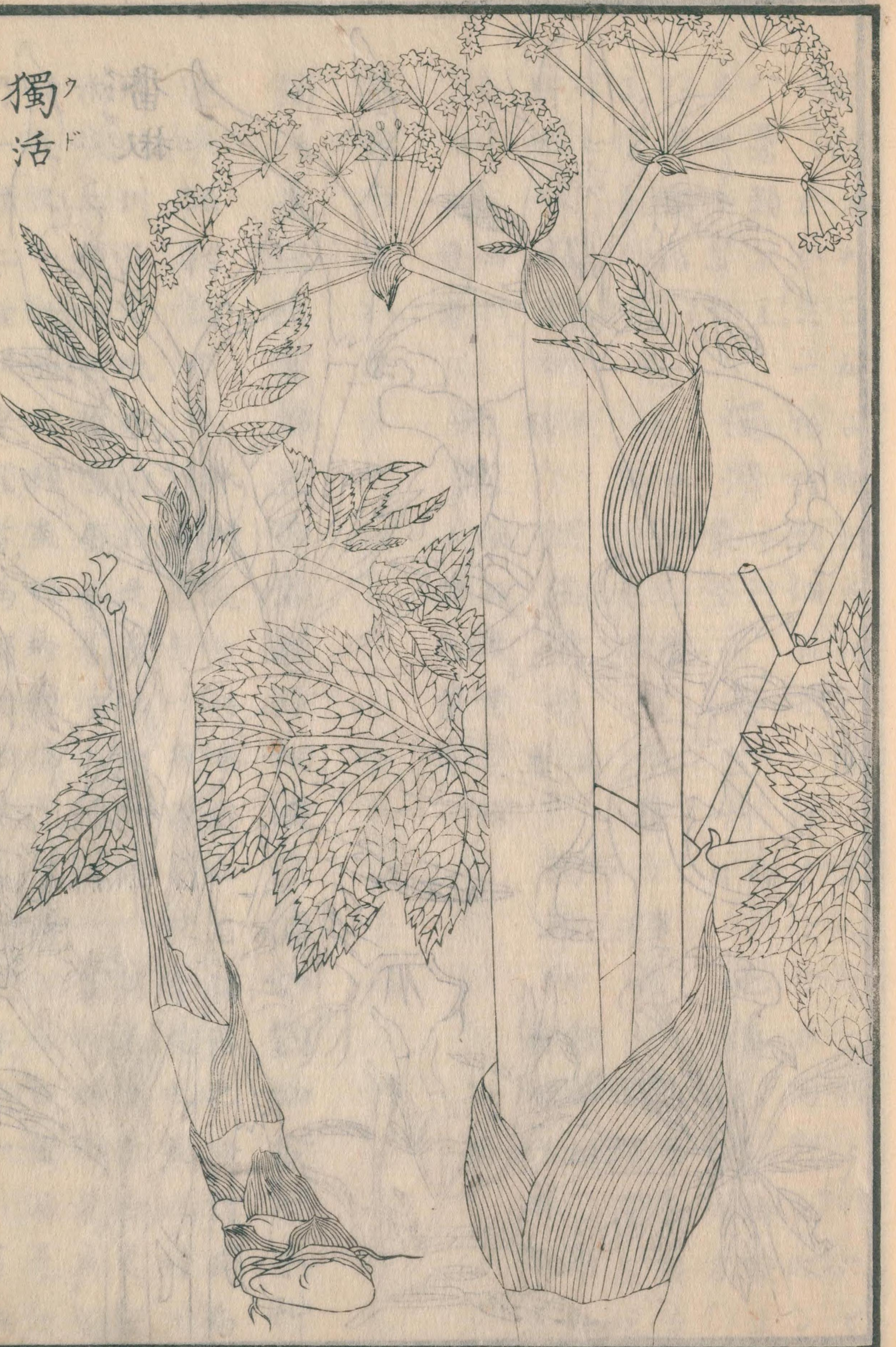
土宇度 根 日向秋月にて言ふ是シ、ウドの根或ハ其莖と綠と分し淪て乾蔬とし蓄て食料に充と云

狗宇度 馬宇度 鹿宇度 藪宇度 花宇度 山宇度 宇度賽 宇度多良志に充て 以上ハ宇度ニ土當歸の名獨羌活に分て俗に

土前 西州宇度の俗名或曰土前胡

狗馬山藪等の名を冠らる者のな亦宇度土前乃外ハ藁呂と主とんの署せ

獨活



番椒（タウガラシ）

獨活　本艸○按に獨活羌活ハ梁以来分て二種とはすれど
古本艸一物證類綱目亦一條とす今亦同類に收る
ハ薬類を主　獨滑　本艸蒙筌　長生艸　綱目　地頭乙鼈　郷藥集成方○
とせるもの
以上獨活　羌活　本艸○蒙筌作羌滑　羌青　護羌使者　事物異名作護羌使
に係る
以上　獨揺艸　別錄　胡王使者　吳普　両平艸　輟耕録○事物異名作両平章
本艸　川羌　四川に産スル者　西羌　陝西に産スル者○以上呂氏藥書

蕃名ラーハス

獨活羌活土當帰三の者或は相混じ清の劉如金が本艸
述にて是を辨論せり　本艸述云按本經止有獨活之條謂其為
一名羌青一名護羌使者是也因此種生
雍州川谷或隴西南並是羌地故本經所謂羌活者即是獨
活非二種也然陶隱居言羌活出羌地而益州西州者為獨
活是又一物而二種矣時珍歴據先哲諸説而曰獨活羌活
乃一類二種以中國者為獨活西羌者為羌活正如川芎撫

芎白朮蒼朮之義入用微有不同後人以為二物者非矣按に獨活羌活一類二種にして其功味自別あり獨活は風濕を散し羌活は水濕を逐ひ能く關節を利にとあるが如き是なり蓋大明が日華本艸に獨活是姜活母也の說に因て莖根を分別て二活乃稱を命せるその所嘗て本藩產する所二種をもて海外に質問せば時清人陳大枝高萬年陳倬為が輩この宇度を以て獨活也とし又陸澍雨陳隙為等鹿宇度を指して羌活也と鑑定せりそ說は前古の紀載を歷據して答へき故に今茲に併せ登て二活の考證とは○凡食物に中るを宇度と稱へ度是牟と呼ぶ要する和山野家園

の異あり形質を亦狹葉濶葉乃別あり但野生を移して家園に植れば大氐一種となれり今俗家園に營るその城宇度と唱へり妻者根より嫩芽を生ず京師嵯峨嵐山わるゆゑに出るその城花宇度と名く庭訓注本に醍醐焉頭牙と出されば むかしより名產とせしなるべし○凡營獨活の法はその根を秋月より土窖に蔵て塵芥を厚く覆ひ紅白乃芽を発さしめ秋の季よりして春晩まで市に鬻ぶとなりその春の初つかる根の尖に紫の茁いづ法を芽ウドといふ二三月莖を生して節に短き茸あり上に紫に下碧に根白しその葉莖は楤木乃取なりて刺

おし但肥太(コエフト)きあり六月白(シロ)き小花(ハナ)攅開(コヽリサク)色芝(キク)あると紫(ムラサキ)と
黒(ミ)実を結ぶ葉芝(キク)あるあり此二種は石の上に生ふる不
変(カハラ)ず夏より秋まで青色(アヲイロ)の芝(キク)を取(トリ)てはを割(ケヅ)りて白(シラ)
穢(ケガレ)を除(ノゾ)き蔬(ハモノヤサイ)となしおせなわみ冬(フユ)月その姑(ハヽ)芝(キク)を窖(ムロ)育(ソダテ)かし
冽(スガキ)或(アル)ハ缸(カメ)桶(オケ)の中へ納(イレ)て肥土(コエツチ)をそそぎて暫(シバラク)曝(スガキトコロ)み室(ムロ)ハ亦
節(フシ)くよく紫(ムラサキ)茎(クキ)を発(イダ)してその状(サマ)い上(カミ)尖(トガ)りて狭(セマ)きて巨獣(ケモノ)
の爪(ツメ)の如し豊(ユタカ)をウド芽(メ)と称(トナ)へ羹(アツモノ)中の芳(カヲリ)気(ケ)を助(タスク)るの宜(ヨロシ)
とし凡(ソ)暖地(アタヽカナルトコロ)あれバ時(トキ)を先(サキ)だちて芽(メ)を花(ハナ)をも
管子(クワンジ)し○菜用(サイヨウ)の獨活(ウド)とハ小(チヒサ)き山中自生(ヤマナカジセイ)の茎(クキ)葉(ハ)み
毛(ケ)あらく糙澁(サラツケ)し根(ネ)の色白(シロ)く臭気(ニホヒ)濃(コヽ)く気味(アヂハヒ)迥(ハルカ)に勝(スグ)て

下品(ゲヒン)あり根(ネ)の色(イロ)黄(キ)く気芳(カホリ)味辛(カラ)き球(タマ)真(マ)と云(イフ)但夏月(ナツウチ)み採(トリ)
收(ヲサメ)るものは軽虚(ウトロ)あて宜(ヨロ)しからず質(シツ)は硬(カタ)きものかれ
ど内実(ミイリ)るを採(エラ)ぶべしそもく志々宇度(シヽウド)は最上(サイジヤウ)は本
藩(ハン)日向(ヒウガ)州(ノクニ)那賀(ナカ)郡(ノコホリ)この山中(サンチウ)に自生(オノヅカラオヒ)せるその時節(トキヨリ)をもて
根(ネ)を探(トリ)り日(ヒ)に乾(ホシ)そるに香気清芬(カウキスガヽン)て深(ワタリ)く異(コト)なり
らず但形質(カタチ)は漢(カラ)の獨活(ウド)に似(ニ)て差活(サカツ)のは近(チカ)きず凡(ソ)江
門等(ナド)の蜂上(イチジヤウ)み售(ウル)家(イヘ)の差活獨活(サカツウド)ハ両(フタツ)ながら
数倍(スバイ)あり関東(クワントウ)の二活(ニクワツ)ハ多(オホ)く信濃上野(シナノカウヅケ)の出(イヅ)
次(ツイデ)の中自生(ヤマナカジセイ)せしハウドを採(トリ)てを芝(クキ)を羌活(キヤウクワツ)と称(トナ)へそ根(ネ)
を獨活(ウド)と称(トナ)ふ二様(フタイロ)ともみ極(キハ)く酷(イヤ)しきふありみ羌活(キヤウクワツ)と

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

称するその一二種あり竹節楓京沙清瀬川高雄山に產
るその葉莖の節深紫にして香氣ありといふ志かれど
もおほ説る嵐山の花ウド薮ウドなどいふものと大同
小異あるのゝ都國に裳へば亦食料に充べし
獨活味苦く辛し性微温にして毒なし○主治痛風の證
ある人常に窖菜のウドを食して良又常に羌活一味水
に煎服て快を取る○産後中風を治るには獨活粉黒豆
一合美酒升一黒豆を炒て熱なゞら酒の中に入て口を封
て大豆の氣を出さず室まで重その酒にて獨活の粉を
七一づゝ用ふ○小兒手足ふるひ口より涎を噴を治す

獨活青皮蝉蛻蠶の霜白朮各一分三色にして甘草少六味和末し
緑豆ほどに丸め二三粒づゝ湯にて用ふべし以上和方一萬方
○中風の口を禁歯をくひつめて冥ざるには獨活三支桂
心一支二分麁末にし酒二盞水二盞入合て三盞に煎なして
滓を濾し五服に分て温にし口をこちあなて服志めよ
○歯の根動て且痛には生地黄獨活各三支細に剉て水二
盞入て一盞半に煎し之を嗽へ又煎せどとも水に漚重
ては御て宜し○産後此咳逆に羌活附子炮る茴香炒る各半
支細末し毎服二錢水一盞塩一捻入きて八分に煎して
服に一服にて愈べし以上萬安方

唐芥（タウカラシ）即番椒也芥菜（カラシ）に依て命（オフ）せし名なり里（サト）
言（コトバ）にマヅモノコナシなども味つり
南蕃（ナンバン）胡椒（コセウ）或説に原（モト）その種を蕃國より漢国に傳（ツタヘ）るなり
にいひ九州地方にては胡椒とのゝいふ胡椒ハ即蕃地
よりといづる蔓艸の実にして味辛（カラ）し故に此物の辛（カラキ）より
その名を借用るなり
高麗（カウライ）胡椒（コセウ）或曰豊大閤朝鮮を征（ウタ）れし時に
此種を携来（タヅサヘキ）しよりこの名あり
といつり蓋唐とも高麗とも
云ハ並に外国の汎称（ヒキ）のゝ
胡椒（コセウ）西州
番椒 時珍食物本艸
地珊瑚
海風藤 以上花史
辣茄 花鏡
白花子
遵生八牋
蕃名ブラジリーンペープル 又レスシース
ゴロートロンデ スピッツ ヲップスターンデ
ブラジリーン ペープル
櫻番椒（サクラタウカラシ）

ケレイン ブラジリーン ペープル メッテ ランガ
ウヲルピゲ ハウウヱン
垂番椒（サガリタウカラシ）
ゴロート ランガ ウヲルピゲ レクト ヲップスターンデ
ブラジリーン ペープル
梅番椒（ムメタウカラシ）
ブラジリーン ペープル メッテ ロンデ ケレイ子
ハウウヱン
檟實番椒（エノミタウカラシ）
ブラジリーン ペープル メッテ ロンデ
キリークス ゲウヱイセ ハウウヱン
右同一種
ケレイン ランガ ウヲルピゲ スピッツ レクト
ヲップスターンデ ゲーレ ブラジリーン ペープル
黄番椒（キタウカラシ）

国立国会図書館 タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

ケレイン ランガ ウヲルピゲ スピッツ レクト
ヲップスターンデ ブラジリーン ペープル

雜色番椒

ブラジリーン ペープル メッテ ランガ ハウウエン

江戸番椒

此種の皇國に入しハ文祿の比なり煙艸と共に將来るゝ云西土にても始て明季に渡まるよし彼の史乘に見えたり今ハ山椒生薑の右に立まれ其実累々て深紅に色愛にべし或ハ筆頭の如く椎実のめく或ハ櫻桃の実櫃の実にも似て或ハ攢生或上向其大小長短尖圓肥瘦亦雅趣あり大なる者実の長さ六寸にいたる幹立ハ七八尺に近し頃間花師養得て目て一丈紅といふ小

なるは鳩爪の如し目て鷹爪といふ魚大なる者王爪の如く微尖あり目て胡頽胡椒と云魚小なる者南天燭子の如しその実上に向ふをば天上守など呼べり 遵生八牋云白花子儼如禿筆頭 又下に垂るものを垂胡椒とも下胡椒とも称ふ一種短肥にして味辣からずして甘きものあり是を甘唐辛子といひ黄熟のを黄唐辛子といひ金橘の如きのを金柑唐辛子など呼べり其種族多く皇國に入て化生するなり蓋暖地に生ものを氣辣し本藩南邊に生ふるは愈太く愈辛し其木冬を經て槁れず又南島に及び沖縄にもまして皆木本となりて高さ四五尺に長つゝ宛

然として一灌木に似たりさらば椒属にして南方の水土に應ひその本邦西土に入ては自艸本と変まるにそ亦奇むべし

氣味辛熱にして小毒ありおほく食へば宜しからず必目を昏し血を破り瘡を生し胎を墮ず瘡家尤いむ所しその毒は黒豆にて消べし因て味醤豆醤に和て煮たるがよし○寒月蛩を塗に此細末を泥に和れば凍凝せずといへり又胤穴を薫ずれば胤逃去とあり○主治食を進め又食を消し能胃口を開く又魚菜の腥氣を殺く細末こなし糊に丸めそちつれば腹痛寒疝腰痛及四肢の痛を治ず其法木綿の袋に番椒を納て常とされば腰寒ぞ又住處の席の下に布ば溼を拂ふ○或書に曰旅行軍陣等の羇旅にあるものは必番椒をもて毎に食ふ所し寒熱共によく防き救ふ手凍てかなはざるには此末を塗てよし又西瓜にて食傷せしを解なり○漬には尚青き中に摘取て紫蘇葉にて裹ミ塩に漬石にて壓とれば甚しき辣うせて食を進むべし○海膽唐芥即番椒膏是加賀の國にてある寺僧の製そのなりとぞ番椒を煎煉て餳飴のごとくなして遠きに送るなりその横宛然海獠獠と塩凝せしそのごとくおとしなれば名くその辛辣殊に猛烈し○

雞又ハ養鳥の患ニハ唐芥を水ニ掻ましてゝ呑しむ○馬の背を揩傷する時三年味醤唐芥五六十莢檗少し入れ焼みして貼る也 馬療方

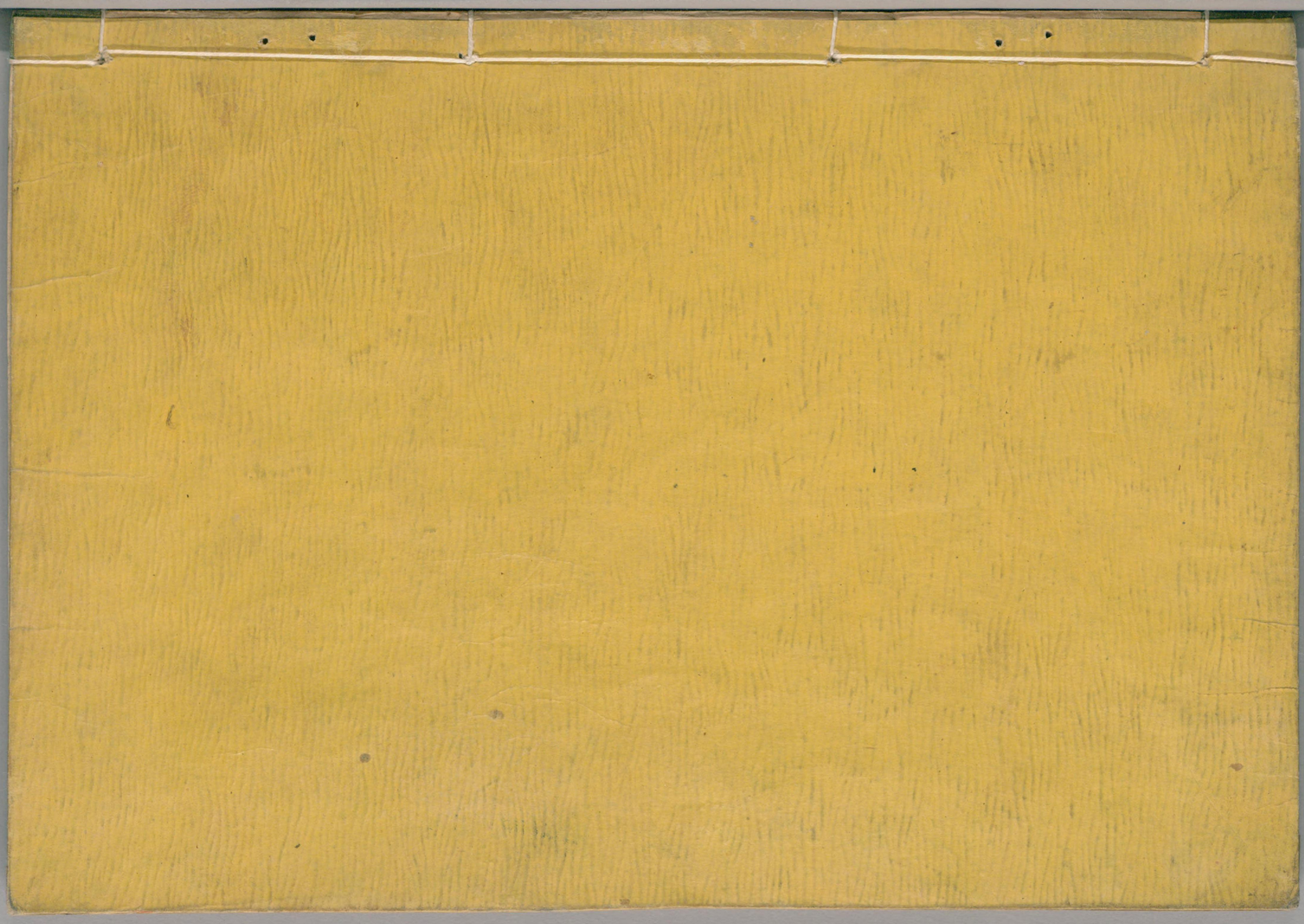
○蝕齒ニハ番椒一巴豆一両油一度酥て

●是猶にし穴に入べし巴豆齒の根にたゝれて爛るにハ菖根を加ゆれば乃愈なり○蝮虵咬に番椒粉を酢にて調附べし○手足の跰を治れハ跰ハ手足を傷して発く大小豆のかし故に麻兎と云ふ漢にて累繭重繭なり番椒を火に煨て焼どゝ云ふ皺は此云底豆のまなり

き糊に押交つ毒残にて大なり此方艸鞵傷にもよし○鼻衄を止るにハ番椒粉を出る穴の上に撥らくべし○又方湯湯に塩を入れ頭に灌もよしいかれどもたらくと頭に如くべし○綿虫を治るにタウカラシを粉にし十二三分食ふべし 以上和方一萬方

○咳嗽には梨子一ツに五十の孔を刺孔毎に番椒一粒を納麪の粉にて包み灰火にて煨て冷るを待て番椒を去て食ふ熱まうちは食ふべからず 御生寶

成形圖說卷之二十五終

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用